

第1章 調査研究の背景と目的

日本は、高齢化先進国である。『平成 28 年版高齢社会白書』によると、総人口に占める 65 歳以上人口の割合、つまり高齢化率は 26.7%、2060 年（平成 72 年）には 2.5 人に 1 人が 65 歳以上、4 人に 1 人が 75 歳以上になるとされている。

世界に先駆けて急速に高齢化が進む中、図書館サービスを再考することは喫緊の課題である。これまで日本の図書館においては、高齢者は「図書館利用に障害のある人びと」としてとらえられる傾向にあった。しかしこのとらえ方には、「自立して生きる」高齢者像、つまりポジティブ・エイジングの視点が欠落している。また、高齢化と切り離して考えることができない認知症への目配りもほとんどなされてこなかったといつてよい。

ピーター・ラスレット（Peter Laslett）は、人生をファースト・エイジからフォース・エイジまでの四段階に区分して論じている¹⁾。ファースト・エイジは「教育を受け、社会化される時期」、セカンド・エイジは「家庭や社会において責任を担う時期」、サード・エイジは「自己達成の時期」とされ、「まだアクティブに活動できる段階であるにもかかわらず、もはや子育てやフルタイムの仕事に従事しなくなった時期に位置し、一般的にはリタイア後の健康で活発な時期」、フォース・エイジは「依存や老衰の時期」とされている。この調査研究では、高齢者をサード・エイジとフォース・エイジの枠組みでとらえなおし、超高齢社会における図書館の課題を明らかにするとともに、そのあり方について考察することを目的とする。サード・エイジでは、超高齢社会を支える高齢者という視点から、生涯学習の観点に立って図書館における高齢者サービスを考える。フォース・エイジでは、高齢化と強い関連があり、超高齢社会を迎えている日本にとっては避けては通れない課題である認知症に焦点をあてる。

この調査研究では、主として 2 つの調査を実施した。一つは、高齢者サービスに関するケーススタディ、もう一つは、高齢者を対象とした図書館サービスの利用およびニーズに関するインタビュー調査である。

ケーススタディでは、高齢者を中心に構成されるボランティア団体が図書館活動を支えている横浜市都筑区、認知症支援に取り組んでいる川崎市宮前区および日向市の先進的事例を取り上げた。これらの図書館において現地調査を行うとともに、横浜市都筑区については「つづき図書館ファン倶楽部」の代表および事務局長、川崎市立宮前図書館については図書館担当係および健康福祉局地域包括ケア推進室担当係長、日向市については日向市社会福祉協議会地域福祉課課長にインタビュー調査を行った。調査の対象と位置づけは、下記のとおりである。

- (1) 高齢者が活躍する場としての図書館
横浜市立都筑図書館「つづき図書館ファン倶楽部」
- (2) 図書館からアプローチする認知症支援
川崎市立宮前図書館

(3) 福祉行政からアプローチする認知症支援
日向市大王谷コミュニティセンター図書室

高齢者を対象とするインタビュー調査では、ケーススタディとして取り上げた川崎市立宮前区立図書館および横浜市立都筑図書館のサービス対象エリアに居住する高齢者を対象として、図書館サービス利用およびニーズに関する調査を実施した。調査対象者は、「図書館をよく利用する人」（週1回以上の頻度で図書館を利用する人）と「図書館をあまり利用しない人」（月1回未満の頻度で図書館を利用する人）の2つのカテゴリーを設定し、各カテゴリーにつき各サービス対象エリア5名、計20名を対象として、半構造化インタビューを行った。

本報告書の構成は、下記のとおりである。

- 第1章 調査研究の背景と目的
- 第2章 超高齢社会とは
- 第3章 図書館サービスにおける高齢者の位置づけの変遷
- 第4章 超高齢社会における図書館サービスの課題とこれから
- 第5章 サード・エイジ：超高齢社会を支える高齢者と図書館
- 第6章 フォース・エイジ：認知症と図書館
- 第7章 ケーススタディ：超高齢社会における図書館サービス
- 第8章 高齢者の図書館サービス利用とニーズ
- 第9章 まとめ

第1章「調査研究の背景と目的」では、調査研究の背景として、高齢化先進国である日本における図書館サービスにおいて、ポジティブ・エイジングの視点の欠落および認知症への目配りの欠如を指摘した。また、調査研究の目的を「高齢者をサード・エイジとフォース・エイジの枠組みでとらえなおし、超高齢社会における図書館の課題を明らかにするとともに、そのあり方について考察する」とし、サード・エイジでは、超高齢社会を支える高齢者という視点から、生涯学習の観点に立って図書館における高齢者サービスを考えるとともに、フォース・エイジでは、高齢化と強い関連があり、超高齢社会を迎えている日本にとって避けては通れない課題である認知症を取り上げることについて述べた。

第2章「超高齢社会とは」では、超高齢社会とはどのような社会なのかについて概説するとともに、高齢化の定義、生活の質を考慮したサード・エイジ論を参考にした高齢期の課題に関する論点整理、地域のさまざまな社会資源を活用しながら地域のつながりを強めていく仕組みである地域包括ケアシステムと図書館に関して考察を行う。

第3章「図書館サービスにおける高齢者の位置づけの変遷」では、超高齢社会と図書館のこれからについて考える前段階として、これまでの日本の図書館サービスにおける高齢

者の位置づけの変遷をふり返る。続いて第4章「超高齢社会における図書館サービスの課題とこれから」では、超高齢社会における図書館サービスの実態および課題を明らかにするとともに、これからの超高齢社会における図書館について考えるための枠組みとして、ラスレットによるサード・エイジ論を取り上げる。また、日本は高齢化が世界で最も早く進んでいるにもかかわらず、高齢者にかかる図書館サービスのガイドラインが存在しないという問題意識から、北米の図書館における高齢者を対象とした図書館サービス・ガイドラインおよび、国際図書館連盟の「認知症の人のための図書館サービスガイドライン」を紹介する。

第5章「サード・エイジ：超高齢社会を支える高齢者と図書館」では、サード・エイジとして的高齢者に焦点をあて、図書館における高齢者サービスについて検討することを目的とする。特に超高齢社会を支える高齢者という視点から、生涯学習の観点に立って図書館における高齢者サービスについて考察する。

第6章「フォース・エイジ：認知症と図書館」では、世界的に大きな社会問題となっている認知症に着目する。認知症は脳の病気（Evidence based）であるが、それ以上にその個人の生き方（Narrative based）が認知症の症候（認知症の行動・心理症状：Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia; BPSD）に強く反映される病である。病としての見方だけではなく、認知症という混乱状態を持ったその個人が感じる世界、見ている風景を理解しようとする「共感的理解（empathic understanding）」が必要な病であるという観点から、認知症について論考するとともに、認知症支援に関する図書館サービスを紹介する。

第7章「ケーススタディ：超高齢社会における図書館サービス」では、高齢者が活躍する場としての図書館として横浜市立都筑図書館「つづき図書館ファン倶楽部」、図書館からアプローチする認知症支援として川崎市立宮前図書館、社会福祉協議会からアプローチする認知症支援として日向市大王谷コミュニティセンター図書室を取り上げ、それぞれのサービスの概要や、サービスを実施するに至った経緯などについて紹介する。

第8章「高齢者の図書館サービス利用とニーズ」では、ケーススタディとして取り上げた川崎市立宮前図書館および横浜市立都筑図書館のサービス対象エリアに居住する高齢者を対象として、図書館サービスの利用およびニーズに関する調査の結果をまとめるとともに、考察を行う。

最終章である第9章では、第1章から第8章までを総括するとともに、コミュニティ主導型図書館サービスモデルという観点から、これからの超高齢社会における図書館について論考する。

各章は、独立性の高いものとなっており、興味のある部分をピックアップして読める構成になっている。なお、この調査研究では主として公共図書館を対象とするが、「超高齢社会における図書館」に関する課題は公共図書館に限定されるものではない。

超高齢社会はネガティブにとらえられることもあるが、高齢化のトップランナーである

からこそ、日本がリーダーシップを示せる領域であるにとらえることもできる。この報告書が、「世界のどの国もこれまで経験したことのない」超高齢社会を迎えている日本の図書館の課題と役割について再考するために、一石を投じるものになることを願う。

注

- 1) Laslett, P. A fresh map of life: the emergence of the third age, 2nd ed, Macmillan. 1996, 328p.